

「iPS細胞 不可能を可能にした細胞」 黒木登志夫 中公新書

日本人の大人なら誰でも聞いたことがある「iPS細胞」、この細胞について紹介する書籍はたくさん出版されているが、この書籍を推薦する理由は二つある。

1) 日本発の傑出した研究の生まれた背景、研究を理解するための基礎知識が近傍の領域の研究者の目でバランス良くまとめられている事。2) iPS細胞へと至る様々な研究についての研究結果を示すだけでなく、当事者達の似顔絵やエピソード、人となりも記述されており研究の現場にいるような気持ちにさせてくれる事の2点である。

1) iPS細胞の発表から10年以上経過し、研究内容についての簡単な説明は高校の「生物基礎」の教科書にも書かれている。iPS細胞は医療と医療ビジネスに直結するため、マスコミ発表や応用面に焦点をあてた書籍も多いが、初学者が教科書の次に読むべき適切な資料は思いのほか少ない。著者の黒木登志夫は日本癌学会の会長であった研究者であり、iPS細胞の研究に直接関わってはいないが、研究の背景、筋道が研究者の目でまとめられ、ジャーナリストが書いた書籍とはひと味違う。2) については、先行研究についても知る事ができる点、生命科学分野の様々な事情を知る事ができる点が、この本の特徴であり、これから研究をはじめ若者の益になると思われる。研究の進展が著しい分野であるので、2015年4月に発行された本書では、応用研究の個々の研究結果の最新情報を知る事はできないが、研究の歴史の部分の記述は色あせることがない。

恥ずかしながら、「読書」をしなくなって久しい。老眼のため、本当に必要なものしか読まなくなってしまった。そのため、紙の本を買ったり（書店での立ち読みが辛くなり、最近は通販専門）、電子書籍（拡大が容易で重宝するが、所有する喜び？が薄い）をダウンロードしたりするのは、もっぱら専門分野の周辺領域（分野は近いがよく知らない問題）に関するものである。定年退職が近くなったが、今後の「読書」についていろいろと考える事が多いこの頃である。